花の静かなる

花野木あや

序

宵闇の中を駆ける一台の馬車が麹町の黒門を通り過ぎたのは、秋の深まる明治十九年十一月のことであった。

馬車の窓に映るはガス燈に照らされた瀟洒な洋館。ネオ・バロック様式を基調とした煉瓦造り二階建てのその建物の名を――『鹿鳴館』と呼ぶ。外国との社交場として造られた鹿鳴館は、その役割通り、社交には欠かせない夜会や舞踏会の会場となり、そして今宵も天長節の祝賀夜会が執り行われている。

黒光りする馬車はゆっくりと減速して車寄せで止まった。千堂家の家紋である獅子牡丹を描いた扉が開かれると、中から燕尾服に身を包んだ上背のある壮年の男が降り立ち、すうっと馬車の中へと手を差し伸べる。その手に重ねられたのは白い手袋に包まれた華奢な手。男はその手を軽く握ると、馬車の外へと導いた。

建物から漏れ出る明りに照らし出されたのは、薄水色の地に白いレースのリボンを飾ったバッスル・ドレス姿の美しい少女だった。艶やかな黒髪は夜会巻きにしており、白い薔薇の花が飾られている。

「さあ、参ろうか」

「はい、お父様」

可憐な声で応え、寧子は父が差し出した腕に自分の手を絡ませ歩き出した。十八歳になったばかりの子爵令嬢にとって、この日が初めての社交界だった。黒目がちの大きな瞳が緊張で揺れていたが、玄関ホールに流れ込む音楽に聞き覚えがあったようで、その白磁のように滑らかな頬にわずかに紅が差した。

「お父様、今日は踊っても良いのでしょうか？」

顔を上げ、弾んだ声で父に尋ねる。

「ああ、構わん。練習の成果を見せるといい」

千堂子爵は表情を動かさずにただ軽く頷いた。

かつて小藩の藩主だった男は幕末の混乱を生き抜き、二年前に公布された華族令に則り子爵位を賜った。今や西洋の真似事である夜会などというものに参加しているのだから、内心ひどく滑稽であった。未だ心はあの動乱の時代を彷徨っている気さえするというのに。

ホールから階段を上がると、広い舞踏室があった。外の冷えた空気から転じてそこは人々の熱気に包まれている。

大礼服や燕尾服を着込んだ紳士たちと、イヴニングドレスに身を包んだ淑女たち。着物姿の夫人たちは壁際で談笑していた。部屋の中心では数人の男女が弦楽四重奏の音楽に乗って踊っている。

子爵は娘と連れ立って見知った顔へと挨拶をする。寧子は微笑を唇に乗せ、洋扇子で時折優雅に口元を隠しながら父に合わせて相手の殿方の言葉に相づちを打った。

それを何度か繰り返してゆくうちに、父は寧子の様子を見てわずかに苦笑を浮かべた。

「寧子、もう挨拶は良かろう。踊りに行きなさい」

踊る相手にくれぐれも気を付けるように言いつける。

「ありがとうございます、お父様」

少女の顔はたちまち明るくなり、小さく会釈をして顔見知りの夫人と令嬢たちのほうへ向かった。寧子は賢い娘である。己に立場を理解し、弁(わきま)えている。

その後姿を見送り、千堂子爵はホールの奥に設置された卓子(テーブル)へと向かった。そこには様々な洋食が並べられ、自由に取って良いこととなっている。しかし、西洋の料理に未だ馴染めぬ子爵はそれらには手を出さず、差し出されたワイングラスを手に取って舞踏室の隅へと移った。交流のある大名華族や爵位を得た家老方、そして共に事業を行っている経営者などと軽い会話を交わしている間に、曲調が変わり数人の男女が中央で入れ替わった。

舞踏室の中央に目を向けると、腕を組んだ男女の中に寧子の姿を見つけた。少女はわずかに頬を紅潮させ、相手の男へと眼差しを向けていた。

まだ二十代前半であろう青年は手足がすらりと長く上背があり、亜麻色の癖のある髪を丁寧に整えていた。その瞳は、明りの元で青にも緑にも見える。表情は柔らかく、わずかに目を細め寧子だけに視線を注いでいる。

異人と組んでいるにも関わらず、寧子の美しさは見劣りしていない。しかし、何よりも千堂子爵はふたりの雰囲気にわずかな違和感を覚えた。

円舞曲(ワルツ)の調べに合わせて、寧子が青年の左肩へと手を添える。青年は慣れた様子で少女の右手をとって、左手をその背中へと回した。彼の先導でふたりはステップを踏み出した。

壁際に立つ紳士淑女の視線が若い令嬢と青年へと集まるのが分かった。誰かが隣でほうと感嘆のため息をつくのが聞こえ、軍服を着こんだ仏蘭西人将校が「あのお嬢さんは

誰なんだ」と仏蘭西語で呟く。
止めなければと、子爵は咄嗟に考えた。
しかし体は思うように動かず、ただふたりを注視する。若いふたりは一寸の狂いもなく見事に舞う。数か月前に舞踏を習い始めた寧子が、青年の手によって美しく花開いたようだった。子爵は焦燥を覚え、ぐっとグラスを持った手に力を入れていた。
やがて円舞曲が終わる。寧子と青年は互いに離れ、軽く会釈をする。それでも互いの視線は交わったまま、逸らされることはない。
そのとき、大きな音がして人々の視線が外へと向かい、間を置かずに宵闇に鮮やかな明りが灯った。「花火だ」と誰かが言ったのを皮切りに、列席者たちがテラスへと雪崩れ込む。
その一瞬に、千堂子爵の意識が逸れた。ふたりがひとの波に紛れるように手を取り合って舞踏室から出たことに気づかず、子爵は宵闇に上がる花火を見上げる。
気づいたときには、もう遅かった。
その夜、ひとりの美しき子爵令嬢が闇の中に姿を消した——。

一

彼女と初めて出逢ったのは、宗秩寮を総括する宮内大臣から婚姻の許可が下り、結納を取り交わした明治三十九年の早春のことだった。養子縁組の手続きを終え、「小早川尚静」という本来の名を改め「千堂季静」となった青年は、その時初めて己の妻となる女性と顔を合わせた。
——顔、と言ってはいささか誤りがあるだろうか。
洋風に設えた応接間から臨む桜の花がはらはらと舞い散る和風庭園を眺めながら、季静は考える。
駒込に建つ千堂家の武家屋敷を訪れるようになって二月。現当主である千堂季貴子爵から家政を学びつつ、週に一度婚約者に会うことが季静の日常の一幕となった。
すうと、襖が開く音がして振り返る。
襖の傍らに座る女中の後ろから、桜鼠の無地の小紋に桜と目白が鮮やかに刺繍された帯を合わせた女性が現れる。
季静は己の六歳年下の婚約者——千堂家のお姫様で、御年十九となった花乃子に向かって微笑を浮かべた。
「ごきげんよう、花乃子様。今日は良い天気ですね」
すると花乃子は僅かに頭を下げた。